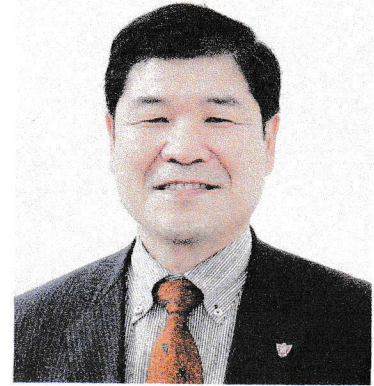


関東支部の取り組みに期待して

関東支部長
上智大学理工学部
早下隆士

学長職も無事に終了し、本年度から関東支部長を務めている。昨年度からは、学会の副会長にも就任し、久しぶりの学会執行部の活動にも参画している。学会に戻ってみると、学会会員数の減少が大きな問題となっているようである。以前は約9000名を誇っていた会員数が、現在では6000名を下回る状況である。内容を分析してみると、企業会員の減少が著しいことがわかる。定年とともに退会した次の世代の入会がまったく少ない状況のようである。新しい世代の企業会員が魅力的だと思える学会活動の場を、より積極的に提供して行く努力は、今、緊急の課題だと思われる。

そこで早速、昨年度から、理事会内に新たに産官学連携委員会の設置を行った。この委員会の主な目的は、産業界シンポジウムを、産業界研究者、技術者の交流、発表の場から、一步進んだ産官学連携のためのジョイントとなることである。まず手始めとして、今年千葉大学で開催される第68年会において、実行委員会とともに「産官学交流カフェ」を企画した。研究室を主催する大学教員によるシーズ研究紹介やリラックスした雰囲気懇親会。このような場があることで、より一層産業界と大学間の交流は活発に進むであろうし、企業研究者に、学会をもっと活用しようという機運の生まれることも期待している。学会員の構成の多様化は、産業界の発展にも大いに寄与するものであり、合わせて学会員の減少にも歯止めがかかるであろう。

全国7支部の中で、関東支部は、本学会の会員数の約半分を占めている。関東支部だけを見れば、産官学の連携は概ね良好であると思われる。関東支部が主催する4コースの機器分析講習、2コースの基礎分析講習の事業運営は、多くの産業界メンバーの積極的な協力のもとで開催されている。これは今後の産業界、大学間の連携のよきモデルとなるべく積極的に情報としても発信し、今後も双方成長努力を続けていきたいと考えている。また、今後の課題としては、若手間の産官学連携についても考えていくべきだと思っている。関東支部の若手交流会の活動を見てみると、まだ大学の若手研究者と学生を中心とした活動に留まっているようだ。今後は、産業界の若手研究者・技術者との連携に、より積極的に取り組んでいけるようなモデルの提示、情報の発信も必要事項だと考えている。

現状では、学会の執行部が進めるトップダウン型の改革だけでなく、産官学の多様な会員から発信されるボトムアップ型の学会改革案を期待したい。現段階で、豊田氏をはじめとする関東支部若手グループから、若手が主体となって産官学の交流活性化を狙った新しい「関東支部分析イノベーション交流会」設置の提案を頂いている。何とも、頼もしい限りである。関東支部長として、全面的に支援していくつもりである。

一つ一つの新たな取り組みは、そのまま現在の日本分析化学会、さらに日本の化学産業界のさらなる発展に繋がるものであることは言うまでもない。